

クラクフの歴史と文化遺産

飯 島 康 夫

抄 録

ガリツィア地方のクラクフ市は、数奇な歴史をたどってきた。ラテン語を共通語とする中世ヨーロッパ世界の東端に位置しながらも、大学の街、ハンザ交易など遠隔地貿易の拠点として発展してきた。ドイツ騎士修道会、モスクワ公国、時代を経て、プロイセン、ロシア、オーストリアによるポーランド分割と国家の消滅、更には近現代ではナチズムと共産主義による弾圧と圧迫に苦しめられてきた。しかしながら、このような中であっても、クラクフは、その中世以来の文化的な遺産と都市の経済的発展の経験、ローマとの繋がりによって、1989年東欧革命旗手の一人である教皇ヨハネ・パウロ2世の司牧の原点であり、数々の修道院や巡礼地となっている。このローマ教皇と現地の若者達との寛いだ関わりが世界青年の日（ワールド・ユースデイ）を生み、2016年7月には現教皇フランシスコも世界各地から集まった若者達と対話をし、まさに世界中の注目を集めた都市となっている。拙稿の趣旨は、中世以降のヨーロッパ各地との繋がりが貿易とこの街の振興を生み出してきただけでなく、20世紀の独裁体制にも屈しない文化遺産を基盤にした剛毅の人達を輩出してきたこと、さらにごく普通の人達の日常生活に言及することである。ともすれば、この街の歴史について語る時、ポーランドという国自体が地図上から姿を消し、圧政という暗闇に目を奪われがちになるかもしれないが、その暗闇に抵抗する光の方に焦点を当てようと試みる必要がある。

キーワード：ヤゲロニカ大学、ヴァヴェル城、司教座聖堂、文化遺産

はじめに

人間のなす生活の営み、例えば、建築、彫刻や絵画、学芸などは、本来、その人の人格の尊厳を表出する創作活動として、非常に尊い。そればかりではない。創造という言葉は、本来、ラテン語の *creare*（作り出す）、「創造主としての神の業」と密接に結びついている⁽¹⁾。周知のように、中世都市社会で各種の職人組合でギルドが同業者として活躍し街づくりに非常に貢献してきた。創造都市論で知られる佐々木雅幸氏は次のように19世紀イギリスのジョン・ラスキンの考えを要約

している。建築・彫刻などに現れる都市景観を形作る人間の佇まいは、「自由な職人の生命の発露」である。つまり、職人たちの人間の生命を維持し心を豊かにさせる生活のあり方を生きる喜びの表現である opera（ラテン語で仕事）とし、他人に命じられた苦役 labor と対置した。貨幣経済によって疲弊する「奴隷労働」に対して、命の輝きそのものが本来の「仕事」のあり方である。このような「仕事」を「復活」させるために、ラスキンはギルド社会の再興を試みた⁽²⁾。中世ラテン世界の都市景観は全て家庭の習慣と民衆芸術の表れである。それらは、人々の生活様式の発露であり、習慣の無限の変化を、時空を超えて現代に生きる私たちに雄弁に訴えかけてくるのである⁽³⁾。

大切なことは、人間が一つの仕事に関わるときに最初から最後まで関わりを持つということである。作業が断片化されると、その時々人間そのものが断片化されてしまう。一つの完成品を見ると、人はそこに充実感と喜びを感じる⁽⁴⁾。人間は、経済的なプロセスの対象になりさがるはいけない。人間のなす仕事は、他人の過剰な利潤追求のための手段や生産過程のヒトコマ、イデオロギーに凝り固まった野獣のものになりはててはいけない。人間は、労働の手段ではない。人間は、仕事そのものを良い意味で支配する主体である。人間の尊厳という視点に立てば、仕事、否、作品ともいべきものの価値は、職業の貴賤貧富にあるのではなく、人間のなす人格の尊さそのものにある。仕事は家族生活を形成する上で基礎的なものとなり、英語で vocation といわれる「呼ぶ」という意味から信仰生活や天職やミッション、才能とも密接に関わる大切なものである。この本来の意味の vocation は、それによって家庭を守り、子供を養育し家庭での教育を支えるものである。ちなみに、既にローマにて列聖されたヨハネ・パウロ教皇は、仕事に対して家庭を支えるための適正な賃金が確保されるべきであるとしている。その上で仕事は、人間にとって良きものであるばかりか、必要に応じて自然を愛容させ、人格形成上、より均衡のとれた成熟度の高い人間へと誘うとしている。そのようにして、ギルドの職人が手がけた彫刻作品などに見られるように、物質的なものはある種の気品を帯びるものとなっていく⁽⁵⁾。

ゆったりと寛いだ余暇は、無為ではなく、祝祭である。労働以外の有意義な観想（日々の生活の煩いと小さな自我を抜け、創造世界の中心をあるがままに観ること；コンテンプラチオ）が文化の基礎を築くといわれている。ここで指摘しておきたいことは、私たちは労働を決して絶対視してはならないということである。既述に相反するかのように聞こえるかもしれないが、労働を絶対視した労働管理・監視社会は、せわしく無茶苦茶に働き、プロレタリア独裁やアウシュビッツの強制労働、昨今の過労死を生み出す。反対に祝祭は余暇に内側から生命を与える根源である。人間が何ものにも脅かされることなくのびのびと恵みを受け取る時、真に自由なものとなる。プロレタリア独裁下では、人間は労働以外の何ものにも意味を見出せず極度に内面的に貧困になった野獣に過ぎない。全体主義的な「労働国家」は「合理性」、「効率性」、「実益」に支配される。祝祭と典礼は、物質的には極度に貧しくても、人間に対して目に見えない世界からの尊い犠牲による尽きることのない恵みと心の豊かさをもたらす。労働を絶対化するいかなる内外の試みもこの尊い秘跡を打ち壊す

ことはできない⁽⁶⁾。クラクフに暮らしてきた人々は、20世紀に「働けば自由になる」とけしかけたアウシュビッツの強制労働というナチズムの極限状態と様々な監視と強制収容所送りという共産主義の脅しと暴力に決して屈することはなかった。広い意味での文化遺産が決してこれらの凶悪な暴力体制を良しとはしなかったからである。

文化遺産とは何か。既述を見れば、祝祭のための余暇が文化の基礎である。コンテンプラチオ(観想生活)こそが生命の源泉であり、奴隷労働(活動主義)はこれとは対極にある。コンテンプラチオは愛し合うものが互いに沈黙のうちに交わされる豊かな対話であり、心の中の落ち着きと憩いと至福のうちに恩寵により瞬時に大切な何かを観ることである。本来、全ての人がこのような観想生活に招かれている。ギリシャ語の *Theoria* も至福直感のうちにあるがまま観ることを指している。ピーパーによれば、それは、人間本来のあり方、つまり、その尊厳を取り戻すために欠かせない典礼と秘跡による恩恵にあずかることを意味している⁽⁶⁾。文化遺産は、これらの生活が小さなことを繰り返し重ねて実践されて習慣となって日常生活に取り込まれた結果とし残るものであるといえよう。このように日々の小さな積み重ねによって作られる習慣、その結果として恵みとして残される文化の遺産がごく当たり前の日常的な風景として残る時、それらは、内外の脅威から人々の暮らしを守るのかもしれない。

クラクフの圧政に対する嫌悪感是非常に強い伝統がある。1938年に教皇になる前の青年ヴォイテワ(後の教皇ヨハネ・パウロ2世)が旧市街を歩いてヤゲロニカ大学のポーランド語・文学科に入学しようとしていた時、彼は、何世紀にもわたって街の風景に刻印・蓄積されてきた霊的及び文化の遺産を人一倍強く感じていたことである。彼は、この街で宗教だけではなく、詩や演劇、その他の芸術に強く魅了されていたのである。さらに敢えていえば、ここの都市景観には単なる文化遺産以上の宝が街のあちこちに深く刻み付けてある。聖スタニスラフ、聖エデットシュタイン、聖ファウスチナなど数々の諸聖人の遺した生きた教え・戒めとしての霊的な遺産が街のあちらこちらに遺してあるのである。この街からヴィテオワが巣立ち、司祭、クラクフ大司教、のちにはローマ教皇となっていったのは、偶然ではないとみられる。

拙稿は次のように組み立てるものとする。まず、14世紀に神学校から発展してきたヤゲロニカ大学やベネディクト会、フランシスコ会、カルメル会などの各修道会がこの都市を文化的に豊かに彩ってきたことを記したい。ここから出版業やワイン、テーブル・クロスなどの貿易が発達していたことが知られていることも付け加えておきたい。次にハンザ同盟の拠点の一つとしてバルト海を介したヨーロッパ中の貿易網の中にあつたこと、特記すべきことは東方とも貿易網を伸ばしていたことである。第三に21世紀の現代人に語りかけてくるヨハネ・パウロ2世のメッセージ、自叙伝、及び聖ファウスチナのメッセージの重要性に言及して終わることにしたい。本稿はあくまでも一試論であることをあらかじめ断っておきたい。

1. 中世世界—クラクフ

クラクフは10世紀後半までにビザンチンでもなくボヘミアでもなくローマ教会と直接的な結び付きを築いたポーランドの歴史に由来している。オーデル川の東に居住していたボラニエ族のミェシュコ一世（在位960年頃-92年）に起源を遡る「ポルスカ」が端緒となってきた。西には神聖ローマ帝国が強くのしかかっていた。これを跳ね返すために、一時的にボヘミアと手を組むが、後にローマからベネディクト修道会のヨルダンを招き、以後ローマとの結びつきは強固なものとなっていった。14世紀になると、ピヤスト王朝のカジメシュ大王（在位1333年-70年）の治世下でヤゲロニカ大学（クラクフ大学；1364年）を創設し都市文化の興隆に大きな役割を果たすことになった。この高等教育機関は東欧ではブラハ・カレル大学（1348年；神聖ローマ帝国皇帝カール4世によって創設）について2番目に古いものである。この学校にちなんで一般に知られるのは、天文学者で司祭のコペルニクス、教会法学者ヴウオトコヴィツ、そして既述のローマ教皇ヨハネ・パウロ2世らである。この学校が開校された時、クラクフは遠隔地貿易によって物質的に豊かになっていばかりか、先述のように文化的、霊的にも豊かとなりつつあった。カジメシュ3世治世下の14世紀半ば、クラクフの高等教育機関はローマ教皇ウルバン5世からクラクフ・アカデミーとして認可された。そればかりでなく、時代を下ってヤドウィガ妃がリトアニア公ヤギェウオ（ヴワデイスワフ2世）と結婚しポーランド・リトアニア公国が誕生した。この王妃夫妻がアヴィニョンにいた教皇ボニファティウス9世に一時的にハンガリー王により閉鎖されていたクラクフ・アカデミーを再興するよう嘆願、1400年に文字通り大学として息を吹き返した。15世紀から16世紀にかけて大学は文字通り黄金期を迎えヨーロッパ各地から学生が参集する文化の中心地となっていた。文芸に身を捧げる者たちが詩、文学などに興じ、ある者はラテン語を通じて書簡を交わし旅先で出会えば、話し合い貴重とされた同一の本を読んでいたのである。クラクフは、ヴェネツィア、バーゼル、アントワープ、リヨン、ケルン、アウグスブルクなどの都市とともに出版業の盛んなところであった。クラクフは歴史家ボミアンのいう、既存の国家、信条をも超えた「文芸共和国」（レスプブリカ・リテラリア）としての一体化された中世ヨーロッパに間違いなく属していた。そのような文化拠点には、例えば、クラクフの他にパリ、ボローニャ、モンペリエ、パドヴァ、サラマンカ、ハイデルベルクなどがあった。異なる民族、年齢構成の者たちがこれらの拠点を遍歴し霊的、知的習慣を修練しようとしたのである。従って、現在のように一箇所に一定の年齢層の者が一定のカリキュラムのもとに勉学・修養していた話ではないのである⁷⁾。この時期のポーランド・リトアニア公国は、欧州有数の国であった。北はバルト海、南は黒海、西はドイツ、東はモスクワにまで迫らんとしていたのである。したがって、同様にこの文化の中心クラクフに学生達はリトアニア、ドイツ、ハンガリー、ボヘミア、モスクワ、スペインなどから集まった。クラクフは西のラテン世界と東のビザン

チン世界の結節点にあったといえよう。その証拠に学問僧達はラテン語を公用語とし、民衆は西スラブ語をラテンのアルファベットで表記した言葉と話していた。

Collegium Maius と呼ばれる大学付属博物館は、この学校の最古の建物である。古い時代の大学の教員、聖ジャン・カンテイの部屋はチャペルとなっている（ジャン・カンテイは中世の学者で1767年に列聖されている）。博物館には、中世の楽器、絵画、家具、硬貨、地球儀などが収容されている。

中世文化の中心地は、ボローニャ、パリ、サラマンカなどがよく知られているが、クラクフもその中に含まれている。既述のとおり、当時の大学の学生は、青年ばかりではなく様々な年齢層から成り立っていた。さらには、学校という建物が大切なのではなく、移動しながら集まって対話が自由に行われていたようである。中世世界では、学問僧達がラテン世界を自由に渡り歩いて公の教えに裏打ちされた真実を求めて文化の拠点を巡り歩いたのである。また、クラクフは、サンチャゴ・デ・コンポステラ、ローマなどともに巡礼者達が集まる街でもあることを覚えておきたい。*Culture*、文化の中心にはともに礼拝するという典礼と秘跡があることを繰り返しになるが肝に銘じておかなければならない。ここには、18世紀の啓蒙主義やフランス革命以降の時空間の世俗化とは無縁の大前提がある。

既述の通り、クラクフは、北はバルト海を介して、南はイタリアのローマを筆頭にヴェネツィア、ジェノヴァ等の各都市のコミュニオンを介し、東はノヴゴロド、スモレンスク、モスクワ以東のアジア世界とも密接に結びついていた。交易品目は多岐にわたる。ごく簡潔に取り上げてみれば、魚、ワイン、繊維製品、炭鉱資源、写本・印刷業、出版業、皮革、毛皮などである。当然であるが、品目ごとにカバーする貿易網の大きさが異なっているが、はっきりいえることはヨーロッパ諸国が新大陸発見をする前、すなわち、大西洋航路を発見する前までは、クラクフも貿易による経済的な恩恵を被っていたことは間違いない。このことは、ヴェネツィアその他の都市と同様であるし、リューベックを盟主とするハンザ同盟の都市も同じことがいえよう。更に言い及ぼすべきことはオスマン・トルコ帝国が香辛料等の奢侈品中心の地中海からアジア世界へと伸びる東方貿易を阻止した事情を挙げなければならない。

2. 遠隔地貿易と興隆

当該の都市は豊かな自然資源に恵まれてきた。肥沃な土壌が穀物、果物、野菜を恵んできたし、森林資源も豊かで材木も豊富であった。11世紀という中世初期には政治と教会（司教座）の中心地という意味で重要性を帯びた。1079年、クラクフの司教、スタニスラフはポーランド王と教皇の權威をめぐる王に諫言したことから殺されたという。13世紀に入ると、東からモンゴル軍の急襲を受けて都市全体が破壊されるという憂き目にあった。しかしながら、この街は11世紀半ば

の時点ですでにプラハから東方をカバーする貿易の拠点であったことが知られている。プラハからクラクフまでの徒歩による道のりは3週間であり、プラハには陶器などを携えてスラブ人商人がクラクフ経由で往来した。クラクフは二つの貿易ルートがあり、ヴィツワ河下流に沿ってバルト海に出るものでバルト沿岸のグダニスク経由で西欧、アラブ世界に通じる9世紀から存在してきたルート、及びバヴァリアからクラクフの東に通じ現在のリヴォフ、クリミア半島に至る陸上交易拠点であった。

12世紀のこの街の様子は、次のようであった。教養のある職工、商人、学問僧が流暢なラテン語を読み書きし、話していたというあの西欧中世都市の姿に似たものであったのである。中世初期のこの街は、まさしくものづくり、貿易拠点、そして、学芸の中心地であったことには疑いがない。教会の近くには工房があり、陶器作りや金属細工が行われていた。ワウル大聖堂に残っている調達品目に目を通すと、カリスが地元と遠隔地の典礼用品として記録されている。地元の土を活用した陶磁器も見あたる。東のルーシからは、小麦粉、鉛、毛皮などがここで売買されていたようである。ウラル山脈以東からスペイン、アラビア半島には、奢侈品の毛皮用品、木材、金属製品が商われ、クラクフは仲介地点であった。概して、ルーシを介して北のバルト海、東方のビザンチン、さらに遠くに離れたアラブ世界にも通じ合っていた。貿易品目には様々なものがあつたが、クラクフには塩が豊富にとれるところから、遠隔地貿易の対象品目とされていた。貿易が盛んになると、商人、職人、パン屋、芸人、肉屋などさまざまな人達がこの街に移り住むようになった。12世紀末から13世紀初めにかけての時期においては街の人口は5,000人に達した。市場もさることながら、たくさんの家屋が見られ、公園やワイン畑が街の美観を彩っていた⁽⁸⁾。

幾つかの交易品は地産のものであり、獣皮、蜂蜜、蠟燭、川魚などがそれにあたる。中世初期の交易による経済発展はこの街の文化的な生活に多大な影響を及ぼし、学芸の中心地となったのもその影響に負うところがある。また、その逆も真である。12世紀、ベネディクト修道会士やドミニコ会士によって各種の図書館が創設されたことは特筆に値する。封建領主どうしの争いや外国との戦争が災いして、ヴァナキユラーな文学の発展が遅れたことは確かである。しかし、13世紀になって当時のクラクフの大司教ヴィンセント・カドリユベック(1150-1223)が年代記(クロニカ)を著した。12世紀初頭の地元図書館収蔵目録によれば、教会の霊的著作や世俗文学が収容されていることがわかっている。この時期、クラクフはリヨン、パリなどに劣らずに西欧ラテン世界の文化の先端を行っていた。ボレスラウ・クリオウステイの宮廷(1116-1119)の行事は、外からこの街にやってきたベネディクト会修道士によって書かれている。貴重な絵画も残されていて、11世紀半ばにケルンから搬入されたものである(*Sacramentarium*)。霊的著作や絵画は東方と西欧の両方からもたらされた。商人達は金、宝石の装飾を帯びた聖母の絵を買い、12世紀には東のビザンチンからモザイク画を購入していた。13世紀にこの街に画期的な出来事が起きた。中世の都市法の中で重要なものであるといわれる1257年のマクデブルク法の採択である。これは、商法、刑法な

どを含み、都市の自由を守る大切な規定である。特にこれは、自治の権利、市民が自ら法を選び都市を治めるために闘うことをあらわしているのである。ポーランドの為政者は西欧、中欧に根付いた都市の法的な根拠を与えた。これにより都市住民は広範にわたる法的、行政的な面で自治を確保したことになる。先のマクデブルク法は1220年ごろに端を発しクラクフに徐々に修正・採用され、長期にわたってこの街に息づいてきた。クラクフの自治は13世紀に最終的に法的に固められていった。この都市の議会は都市の法を守るとともに、市民の名誉と便益を図ろうとしたのである⁽⁹⁾。

カジメシュ大王もこの都市の文化発展に貢献し、数々の教会、城を建てることに奔走したことが知られている。彼はクラクフ周辺の隣接の居住地を許可し、クラクフ市街と周辺地域に学校をたくさん造り、教育に心血を注いだ。既述の通り、イタリアを範としてヤゲロニカ大学を創設したのも、彼の教育政策の一環であった。1364年のことである。14世紀末に聖バーバラ教会の建設が始まった。ヤゲロー王朝が1410年のタンネンベルクの戦いでプロシャのチュートン騎士団に勝利し、クラクフはますます繁栄するようになった。15世紀後半、同市は、学芸面でも、交易面でも、特に絵画、貴重な写本、彫刻、ものづくりといった面でも、文化の花が咲いた時期といえる。ウィット・ストワスの作品に見られるように、聖母マリア教会祭壇のゴシック彫刻の気品ある様がこれを鑑賞するものを魅了してやまない⁽¹⁰⁾。

1257年から1500年の期間は貿易が都市に商業上、文化上の繁栄をもたらした。これは既に述べたところである。しかし、その後、新大陸の発見や大西洋航路の隆盛はハンザ同盟の一員であったクラクフを少なくとも経済的に衰退期をもたらしていった。中世に、この都市はハンザの一員であったと同時に、イタリアの都市ヴェネツィアやジェノアとも密接に結びついていたからである。河川を通じてこの街はダニューブ、コンスタンチノーブル、リヴォフ、ブラスチラヴァ、ウィーン、スカンジナビア半島、スペインの諸都市など、文字通り、ヨーロッパ大陸のかなりの部分と縦横無尽に貿易網を張り巡らせていた。ハンザとの関係は14世紀初頭に遡及することができる。フランドルと繋がっていた街はクラクフであった。13世紀から16世紀を通してハンザ同盟の広域貿易網に組みこまれていたのであり、ロンドン、アントワープ、ベルゲン、リガ、ノヴゴロド、モスクワまでに及んでいる。もちろん、交易品目によって、交易網は大小様々である。南との交易品目は奢侈品が多く、香辛料が取引された。クラクフには外来の様々な商人が住んでいた。ジェノワ人は黒海の交易ルートを支配しており、カフファに交易のための出先拠点を有していた。同じように、ヴェネツィア人もドン河畔にアゾフに拠点を張り巡らせていた。クラクフ在住のジェノワ人がアストラハン、コンスタンチノーブル等東方から香辛料を輸入しニュルンベルクやブルージュ等西欧都市に輸出していたことがわかる。例えば、胡椒を取り上げてみよう。クラクフの商人はカフファで大量に胡椒を買い付けたアルメニアの商人の手を借りてリヴォフ経由でこれらを輸入していた事実がある。その他、東方貿易では薬品、調理品、生姜、シナモンなどに対する需要があったようである。塩も重要な取り引き品目であった。交易範囲は限られており、ルブリンなどポーランド内のやや内

陸部の都市に及んでいただけであった。皮革製品はモルダヴィアやリトアニアなどから買い付け、バルト海沿岸都市やブルージュまでの範囲内であった。ここでは、同市が商った品目の詳細について述べることはできないが、概して広範な交易網の仲介拠点に身を置いたことで、クラクフは、市街地内に商人や職人のギルドと呼ばれるコミュニティを築いていた。その中には、建築家、肉屋、パン屋などで組織されたものであって、専門化された仕事の必要にこたえるためにあったのである。その他、宝石職人、金職人、貴重な文献・写本取扱人も大きな役割を果たし、各種の写本・書物も流通の対象であった⁽¹¹⁾。

このほか、交易品目として繊維製品がある。西欧の繊維製品の卸先はフランドル、英国、イタリア諸都市であった。繊維製品と絹、織物はヴェネツィア、フィレンツェ、ジェノワ、ポォローニヤの各都市の商人がクラクフにやってきて売買された。繊維製品の交易網は広範な地域に及び、主に西は英国のベバリー、コルチェスター、ロンドン、中核交易点はブルージュ、ゲント、バルト海沿岸のグダニスク、イタリアのヴェネツィア、フィレンツェ、ジェノワ、ポローニヤから輸入して、東はリヴォフ経由でモルダヴィアやコンスタンチノーブルなど東方の都市に輸出していた。織物の仕入れ先だけをみると、ブリュッセル、ボヘミア、ルーヴァンなどの地名が出てくる⁽¹²⁾。中世初期、クラクフ周辺の葡萄園で葡萄が栽培されていた。この結果、地元のワインがブルージュ、グダニスクや南欧ではヴェネツィアに流通し、東方はブダやトランシルヴァニア地方、黒海にまで浸透させていた。ワイン交易について詳細をみていくと、地元のワインが 14 世紀をピークにして、1400 年以後気候条件や輸入品との競争で地元生まれのワイン交易が衰退していった。16 世紀に入るとハンガリー、モルダヴィア、ライン地方やスペインのグラナダ、ギリシャのモームゼイ、イタリアのヴェネツィアから外国産の葡萄酒が輸入品となってこの街に入ってきた⁽¹³⁾。

繊維製品、織物、絹、葡萄酒などに見られるように、都市の熟練工達が同業者組合、つまり、ギルドを組織していた。クラクフにも 12 世紀から 13 世紀にかけての欧州都市と同様に熟練工ギルドが形成され、仲間たちで取り決めていた規程や特権を享受していた。王あるいは市議会によってこれらギルドの仕事上の各種取り決めが認められていた。1505 年には同市は地産地消のものづくりに従事するギルドが認められていたばかりでなく、遠隔地貿易で輸出するものづくりのギルドが認められていた。地産地消のものづくりのギルドはパン屋、鍛冶屋、大工、洋服の仕立屋、皮革業者たちが含まれていた。遠隔地貿易のギルドは鐘造り、金細工師、刀剣の鑄造工、縫い針作り、画家や陶工たちでつくられていた⁽¹⁴⁾。珊瑚、真珠、水晶、ルビーなどを使った宝石類もこの街の重要な交易品目であった。ライブチヒの金銀とポーランド東南部のヤロスラフの真珠・水晶装飾品もクラクフの街で取引されている。クラクフのギルドは、商品の品質、価格などの面を管理していた⁽¹⁵⁾。

市議会は他の都市出身者に市民権を与えることに対して非常に厳格であった。特に相手が外来の商人である場合は特に精査した。市民になるためには、幾つかの条件付きであった。まず、市に不

動産を持っていること、次に既婚者である事（独身者は市に対する帰属意識が低く容易に蓄積した富とともに街を去る可能性が高いと見なされたため）、更に出身地を明らかにする事及び持参金を持ち寄る事などが条件とされた。ハードルをクリアして市民としての権利を得た者は、結果として二重の市民権を持つ事も稀ではなかった。外来商人の出身地はヨーロッパ中に見られた。主な出身地を例示すると、ヴェネツィア、ジェノワ、フィレンツェ、サンクト・ガレン、フランドル、ラインラント、フランクフルト、ケルン、モラヴィア、レーゲンスブルク、ウィーン、ニュルンベルクなどである。このような状態は、遅くとも1390年から1500年まで続いていたようである⁽¹⁶⁾。

16世紀、クラクフ市は黄金期（1506-48）を迎える。この黄金期は、アレキサンデル（1501-6）、ジグムンド1世スターリー（1506-48）とジグムンド・アウグスト（1548-72）治世下のポーランド・リトアニア公国（ポーランド・コモンウェルスとも呼ばれる）の興隆期と重なっている。クラクフは、この時期に数多くのヨーロッパ都市と交流し、文芸が隆盛を極めた。遠隔地貿易の成功が文芸の繁栄を支えていた。この黄金期に様々なものが交易の対象となったが、ここではその幾つかを例示しておくにとどめる。香辛料の輸入先はリスボンと経由して喜望峰、極東からであり、アントワープ、ハンブルグ、グダニスク、ポズナンを介してクラクフに達し、アドリア海のヴェネツィア、ウィーンと交流し、南方向では黒海を通じてオリエント世界にも繋がっていた。この香辛料の輸出先はというと、現在はチェコのプラハ、ルーマニアのクルジュ、ポーランド内のプロツワフである。塩の交易は、まず近隣で取れた塩を遠くはヴィリニウス、コンスタンチノーブルに輸出していたようである。皮革製品は東方のノヴゴロドやモスクワ、モルダヴィアから調達したものをウィーン、ヴェネツィアをはじめとするイタリアの諸都市、ライプチヒ、コンスタンチノーブルに輸出していた。繊維製品の交易網は広範囲に及ぶ。仕入れ先はロンドン、フランドル、ナポリ、ピサ、ミラノ、フィレンツェ、マントヴァ、ヴェローナ、リヨン、フランクフルトなど西欧各地やコンスタンチノーブルであり、これらの都市から調達して、輸出先はウィーンのほか、アドリアノーブル、モスクワなど東方の様々な都市に向けられていた。クラクフの地元には織物産業がなかったが、多様な仕入れ元を持っていたので市には「クロス・ホール」がある。イタリア諸都市から卸し入れした織物は旧市街の中心市場で売られた。イタリア諸都市の商人が「クロス・ホール」で商売に勤しんでいたばかりか、ドイツ系の商人やアルメニア人、ユダヤ人など多様な民族の商人たちがここで仕事をしていた。その他、東方から絹、錦、ビロード、テーブル掛けに使うダマスク織り、タフタ（こはく織りといわれる光沢のある平織りの上質な生地を使った織物）などがオスマン帝国領内の産地からリヴォフのアルメニア人やユダヤ人の仲買人を仲介してこの街に輸入されていた。毛織物及び綿は広大な交易網を形成しており、全欧、中近東、極東の仕入れ先からトランシルヴァニア地方を経由してこの街に入ってきていた。16世紀末及び17世紀初めにはユダヤ商人がこの街に流入し始めたことがわかっている。彼らの出身地はヨーロッパ中のありとあらゆる場所である。現在の国名でいえば、主にドイツ、イタリア、スペイン、ポルトガルなどである。クラクフ在住のユダヤ商人と交易

網をかたちづくっており、クラクフの仲介貿易に貢献していた。地元産のものはハンガリーやモラヴィア、リヴォフ、ルブリンなどに輸出されていた。上質な繊維製品を商うのはイタリア半島で地中海沿岸に面した諸都市、特にメッシナ、ナポリから卸売りされ、ヴェネツィア産の高品質の織物製品や洗練された絹製品がウィーン経由でクラクフに輸出されていた。地元の商人、ヴァレイ・モンテルピは高価なイタリア繊維製品を取り扱い、北イタリアの諸都市にある工房と組み、ニュレンブルクとウィーン経由で宮廷御用達商人として活躍したことがわかっている。イタリアの都市、ルッカ産の絹織物やミラノ産の絹が街でよく流通していた。しゃす織り製品はフィレンツェ、ルッカ、ジェノヴァ、ナポリ、ミラノ、ボローニャから仕入れられていた。絹織物に関して言えば、先述のようにイタリアの諸都市に工房を構えるケースが非常に多かった。ルッカ、ヴェネツィア、ボローニャ、ピサなどである。商品の納め先は、既述のように宮廷御用達の場合や教会の為に仕立てた典礼用のケープ（肩から掛ける短い袖なしの外套）であることが判明している。他の交易品として、葡萄酒が挙げられよう。ハンガリー産ワインが宮廷に納品されていることが知られている。他の葡萄酒の産地としては、モラヴィア、更にリヴォフ経由のギリシャ系、アルメニア系、ユダヤ系の商人達がトルコ及びトランシルヴァニア地方を陸路で仲介貿易し納品したものがある。このほかに、西欧産の葡萄酒としてライン産ものが有名であり、フランス、ポルトガル、スペイン及び東地中海産の品物が知られている。ワインの取引について言えば、概して、この街在住でイタリア諸都市出身の商人が商売の幅を利かせていたといえるであろう。しかし、ヴェネツィアやジェノヴァがやがて衰退していくにつれて北のアントワープが欧州の通商拠点として台頭してくる。ワインの納め先は、宮廷貴族や教会だけでなく、熟練工その他の一般市民であった。後者の存在は都市の中で大きな役割を果たしていた。職人が宮廷の要望に応じて仕事をおさめる手工芸品は長い伝統があった。中世末期にはクレパルズが街中にクラフト・センターをつくり、手仕事はこの都市で最大のギルドの一つであったからである。製紙業と出版業も、高等教育施設の存在感も手伝って、高識字率へとつながり、学術書・写本づくりが盛んな文化上の一大中心地を形づくっていた。クラクフは、印刷業が盛んで、最初の本を出したのも比較的早かった。1474年のことである。これは、この街がパリ（1471）、ポワチエ（1479；フランス西部の都市）、ルーヴァン（1479）、ヴェネツィア（1470）と並び、出版業の栄える文化都市であることがわかる。ロレーヌ地方のメス出身のカスパー・ホチフェダーが1503年に富裕なワイン商人の援助で印刷工房を市街に創設し、バヴァリア出身のフロリアン・アングラーが1510年にもう一つの印刷工房をつくった。印刷工房の創設が相次ぎ、この街の書物文化をかたちづくっていった。ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語、ポーランド語、ハンガリー語等、様々な言語で書物が出版されただけでなく、大学街として教科書やカレンダー、地図が刊行された。書物文化の担い手は地元の大学や修道会だけでなく、ハンガリーの民衆でもあった。特にヘブライ語で書かれた書物は西欧に流通している。この街で最初のヘブライ語の教科書が1535年に世に出ると、ヘブライ語文学に関する書物に対する関心が堰を切ったように他のヨー

ロッパ都市でも注目を引いた。この街の書物文化を下支えしたのは、ニュルンベルク、シュレジェン、モラヴィア、オーストリア、ハンガリーの読者層であった。ポーランド・コモンウェルス全体としてもその領土を南と東に拡張し、東にはバルト海沿岸一帯、北方はスモレンスク、そして南はアゾフ海からクリミア半島、ドニエプル河一帯、ウクライナ地方に拡張した政治的にも安定期にあったのである。しかしながら、17世紀後半から18世紀初頭に入って、この時勢は衰えを見せる。東と南に強大な帝国が現れた。東方にはモスクワ公国（後にロシア帝国）が歴史の舞台に登場し、南方のバルカン半島や黒海地方を中心にオスマン帝国がポーランド・コモンウェルスに差し迫ってきたからである。クラクフ市はオスマン帝国の登場で地中海貿易の一定の既得権を奪われたことは市にとって大きなダメージであった。東方のモスクワ公国のイワン3世（1440-1505）、そしてその後継者イワン雷帝（1530-84）が為政者となると、強大な脅威となっていった。特に東の脅威はロマノフ朝になってさらに深刻になり、ピョートル1世の時には市はロシア軍によって蹂躪されヴェルヴェル城も占領されてしまった。時は降って、1830年代になると、ポーランド領内にロシア軍が常駐する事態を招いた。クラクフの街は1749年3万人のロシア軍が現在のポーランド南西部からチェコ北東部に当たるシレジアに行軍する際に通過している。このような外敵のほか、街は天候不順によってヴィツワ河の氾濫という天災に見舞われた。18世紀半ば、市の人口は内外の諸要因により減少した。商工業、学芸という栄華を極めた往時の街の姿は失われていった。ポーランド・コモンウェルスの首都であり、文化都市であるクラクフは、軍隊が非常に小さく、装備も貧相であった。文化都市の由縁ともいえるかもしれない。このため、東方のロシア帝国、新興のプロイセン、オーストリアの挟撃にあい、東西南の強国の餌食となってしまったのである。1757年から1763年にかけての時期において、ロシア軍がブランデンブルクとポメラニア地方の戦地に赴くにあたり、ポーランド領は占拠、略奪の対象となり、新興プロイセンのフレデリック2世の攻撃に曝されることになった。グダニスク、ポズナンの諸都市はロシア軍のプロイセンに対する橋頭堡となり、クラクフはオーストリア帝国によるシレジア攻撃の拠点として利用された。その後、ポーランドの首都はワルシャワに遷都されていった。1793年になるとクラクフはワルシャワに次ぐ第二の都市と宣言されるようになっていった⁽¹⁷⁾。その後、強国の脅威に曝されながらも、スタニスワフ・アウグストはポーランドの学芸を庇護した。この王のもとで出版業や劇場が栄え、学芸に秀でた者達も彼の好意的な文化政策の恩恵を享受した。しかし、この文芸の興隆も一時的なものに終わった。三度にわたる領土分割（1772年、1793年、1795年）という不運にあい、クラクフはバルト海沿岸の港湾都市へのアクセスを失うことになった。塩と小麦の遠隔地貿易を確保するために、クラクフは、港湾施設の建設を試みたが、ロシア・スウェーデン戦争（1788-90）が災いしてバルト海貿易を展開できなくなり、交易網は周辺地域に縮小せざるを得なくなってしまった⁽¹⁸⁾。

3. 近現代一東と西の狭間で

クラクフという大学街には豊かな文化的な営みを積み重ねてきたという背景からして暴君や圧政に対し抗う伝統が根付いている。既述のように、ヤゲロニカ大学の母体はヤドウィガ妃の援助で創立されたアカデミーに由来している。この都市の文化的遺産が数々の逸材と靈的にも豊かな宝を近現代に至っても保ち続けている。

例えば、大学で学んだ中世末期の聖書学者ヤン・カンテイは1767年に列聖された。定説ではないが、1596年に首都がワルシャワに遷都した後も、この街は中欧にあって文化的にも、靈的にも豊かな中心地であり続けてきたといえる。同市の書物文化に限らず、知的にも靈的にも豊かに積み重ねられてきた日常的な生活こそが、三度の分割によるポーランドの地図上から消滅という不運にあっても、祖国再興の夢を消し去ることができなかつた理由といえよう。街中のカフェや貴賓館その他いたるところで絶えずこの夢は語り継がれたのである。詩人、劇作家、画家と芸術に多才であったスタニスワフ・ヴィスピアンスキはこの都市文化の中心人物であり、ポーランド文学と絵画・彫刻・演劇など視覚芸術に新風を吹き込んだ。ポーランドの独立運動中（1863）、一貫した奉献生活を捧げたラファル・カリノウスキとアルバート・チミエロウスキらも、列聖手続きにあり、英雄として人々の心の中にいつまでも生き続けるであろう⁽¹⁹⁾。1918年には、ロマノフ（サンクト・ペテルブルク）、ハプスブルグ（ウィーン）、ホーエンツォレルン（ベルリン）が崩壊したことでポーランドの第二共和制が出来て、クラクフは再び歴史の舞台にその姿を現すようになった。しかしながら、それも東の間のことであった。1939年から1945年の第2次世界大戦の間、街は受難の苦しみを受けることになった。大勢の大学教職員がナチに逮捕されベルリンの北にあるザクセンハウゼン強制収容所送りとなってしまった。国際的に強い抗議の声があがったにもかかわらず、大多数の人々が死に追いやられたのである。このことは中央校舎の玄関が今も、伝えている。ポーランド文化を根絶させる目的で学校は閉鎖された。しかし、大学は地下組織として活動を続けた。逮捕を逃れたわずかばかりの教員が若者達と一緒に閉鎖された授業を継続させ、学校の組織と教育そのものは水面下で脈々と続けられたのである。確かに表面上、教育や文芸活動、出版も著しく制限されたかのように見えた。が、ナチの軍令によって学校を閉鎖、勉学を禁じることはできない。ナチズムだけでなく、戦中戦後は東から共産主義の脅威がこの街を襲うことになる。カチンの森の虐殺(1940)ではソ連の秘密警察がポーランド人将校や聖職者、文化人、一般市民を残酷な形で殺害した。クラクフでは反共産主義の支持が最も高かった。このような街の政治文化をあざわらうかのように、共産主義者は郊外にポーランド史上1000年にない前代未聞の、教会の全くない製鉄所の町「ノヴァ・フタ」を建設した。この政策はまるで文化都市クラクフの都市景観を煤煙でどす黒く侵食するかのようであった。東からの脅威は都市景観をかたちづくる市民の文化的・靈的遺産を崩壊させる意図

を持っていたわけである。何千もの司教、司祭、修道士が理由もなく逮捕され、教会も迫害にあった。ナチズムもコミニズムも個人を全体主義国家に完全に服従させようという点では同じであった。クラクフは、修道女、聖ファウスチナが観た啓示にある通り、この凶暴な国家という偶像崇拜に決して屈することはなかった。カロール・ヴォイティワ（後のヨハネ・パウロ2世教皇）はクラクフに近いヴァドヴィツェ生まれで、1938年にこの街にやってきた。その後、彼は40年にわたりこの街に住むことになった。学生、俳優、労働者、神学生、司祭として、また、詩人、劇作家、文芸批評家として、スポーツマン、哲学者そして大司教として、この街をこよなく愛した。1963年12月にクラクフ大司教に任ぜられると、上流階級でも貴族でもないが、教会の力強いリーダーとなっていった。学究肌の聖職者でこの街を特徴づけるような品位のある教養人であった。学問と同時に信仰心が厚く、その均衡のとれた性格が人々の心に魅了するものがあった。冒頭で既に述べた通り、文化（Culture）とは礼拝が源泉となっており、彼も人間の尊厳を守るため、礼拝の自由を共産政権に突きつけたのである。共産党政権は多数の人員とお金をかけて、なんとかして彼の活動を妨げようとしていた。365日24時間態勢で秘密警察の監視下に置かれていた。このような過酷な状況下にあっても、若者との会話、人格の形成という霊的指導、そして何よりも市井の人々と真摯な友情を培うことを怠ることはなかった⁽²⁰⁾。

彼が愛するこの街に出版活動に従事する「ズナック」があり、司教、司祭、修道士、信徒からなる組織で180,000か所において「要理教室」を開いていた。ポーランドは共産党支配下にあつて9割以上が洗礼を受けた信者という矛盾する状況であったのである。共産主義体制はあくまでも外から無理やり押し付けられという感覚が一般市民には強かった。クラクフはヴォイティワ枢機卿のいる大司教座である。都市の景観はいまなお、壮麗な建築群とタピストリを現在に残している。いかにレーニンの名を冠した製鉄工場の隣町「ノヴァ・フタ」がクラクフの文化遺産、なかんずく、その宗教的な雰囲気を押しつぶそうと試みても、無駄であった。しかも、この「ノヴァ・フタ」で共産党政権は敗北を認めざるをえなくなった。木製の十字架を立てようとした民衆が、警察の再三にわたる妨害に屈することなく聖母に捧げられた教会をつくったのである⁽²⁰⁾。

ヴォイティワはナチ占領下、戦中の1940年、クラクフ近郊のザクジョヴェックの石切場で奴隷労働を体験している。零下30度という極寒の中、見窄らしい服を身につけ、ハンマーで石を割り手押し車で運んでいき、貨車に一杯にしてはまた元に戻って岩を割るという単純な繰り返しである。昼の過酷な肉体労働の後、彼は夜間、こっそり勉学にいそしんだ。このように彼は身をもって奴隷労働の厳しさを熟知していたのである。労働現場で労働条件の改善を訴え、レクリエーションの大切さとともに、宗教的、文化的要求を満たすよう当局に掛け合い動いていた。ヴォイティワはカルメル会の改革者達、特に十字架の聖ヨハネとアビラの聖テレジアから霊的な糧をくんだ。ゲシュタポの監視をくぐって、地下神学校に密かに通った。その後、ヴァヴェル城の聖ベルナルドを崇敬する聖堂で司祭に叙階された。宗教的なもの以外にも、彼は精力的であった。愛する街に地下劇場を

つくり、芝居の稽古、演劇を披露したのである。時には、仲間とともに文学談義に興じ、詩を書き、演劇のシナリオ作りにも熱心であった。スキー、カヌー、ハイキング、登山、テニス、バレーボール、水泳やギターにも楽しみを見出していた。精神の健康と肉体の健康をバランスよく鍛錬していたのである。戦後の共産主義圧政の中、先輩のヴィシンスキ枢機卿が修道院に監禁されて、ほかでも聖職者で牢獄は満杯で頻繁に鞭打ちが平然と行われていた。ヴォイティワはというと、教会の指導者（クラクフ大司教）になった後も、学問、文学、ジャーナリズムに関わる仕事を続けていた。例えば、彼の著作『愛と責任』は最初、ポーランド語で出版されたのち、イタリア語、フランス語、スペイン語の翻訳が出るようになった。この点でまさに彼は、クラクフの文化遺産を引き継ぐ申し子であったといわざるをえない。共産主義に対峙して、彼は人間の尊厳を擁護する立場から政治に対する不満を公にする自由、率直に意見を表明する自由を権利として政府に要求し続けた。人間には国民的・宗教的な伝統に従って教育を受ける権利があるとして、政府によって世俗化を強制するカリキュラムの押し付けは肉体的奴隷制度にまさり劣ることのない精神的な奴隷制度であるといい切った。高等教育こそが青年の人格的成長に大切なものであり、視野の狭い専門分野を避け、広い意味での教養「リベラル・アーツ」が必要であることを説いた。人は人であるというだけで尊厳を持ち、単一階級の名の下に派閥闘争の奴隷になってはいけない。警察や監獄、監視社会を拡張し弾圧し、震えおののかせるような暴力行為をしても何の解決にもならず、人間の生まれながらに有する尊厳、自由、市民権を尊重することが要求されるとしている。無神論者は現在を超えた生命に対する信仰も希望もない寂しさから不死への思慕を此岸的な集産主義に走る。ヴォイティワはナチズム、共産主義の暗闇を経験したが、クラクフの文化遺産の継承者であった。現代の純粋科学や技術は、肉体的にも精神的にも人間を破滅に導く暴れ馬である。現代の技術の成果を享受しつつも、その行き過ぎを抑えるには精神的な枠組みが肝要であるが、その準備が遅々として進んでいない。現代人の物質本位、消費本位、自由放任に警鐘といえるのではないだろうか⁽²¹⁾。

彼がこよなく愛したこの街への想いは、大学の他に、司教叙階のヴァヴェル司教座聖堂、神秘家聖ファウスチナの墓、聖スタニスラオなどへの崇敬と重なっている⁽²²⁾。

まとめにかえて

クラクフの歴史を概観してきたが、ここでまとめにかえてひとことそえておきたい。同市が各種の圧政や弾圧を生き延びてきた背景には、抽象的な文化的遺産にあるのではなく、また、教会や指導者の力強いリーダーシップのみにあるのではなく、ごく普通の人々の生活や家族生活に根ざしたものの役割が非常に大きいのではないのだろうか。具体的に言えば、普通の人々が肌で感じ取り実践してきた習慣と日常生活の祝祭である。「ノヴァ・フタ」では、宗教に対する嫌悪感を醸成され、住民は相互監視状態に置かれていたが、クラクフの歴史が守られてきた背景には、日常生活に根ざ

した慣習や暦に応じて淡々と行ってきた祝祭が最も重要な役割を果たしていたといえる。プロレタリアート独裁というイデオロギーを具現化しようとしたこの製鉄所の隣町でさえ、実際は多くの人々が毎週のように教会に通い、種々の祝祭を継続し、共産党政府はこれらのある種の習俗とみなしていたから、各種の弾圧にも風穴を開けてきたのではないかとみられる⁽²³⁾。

注

- (1) レモンド・ウイリアムズ, 『完訳 キーワード辞典』, 平凡社, 2011年, pp. 130-131
- (2) 佐々木雅幸, 『創造都市への挑戦』, 岩波書店, 2001年, pp. 28-29
- (3) ジョン・ラスキン, 『ヴェネツィアの石』, 法藏館, 2006年, p. 303
- (4) 山崎亮, 『コミュニティデザインの源流』, 2016年, pp. 24-27
- (5) Arthur McCormack MHM (1982). *The Teaching of Pope John Paul II Human Work: Catholic Truth Society*, 6-7
- (6) ヨゼフ・ピーパー, 『余暇と祝祭』, 講談社, 1999年, 参照。See also, Josef Pieper (1998). *Leisure The Basis of Culture*: St. Augustine's Press, 5
- (7) クシトフ・ボミアン, 『ヨーロッパとは何か』, 平凡社, 2002年, pp. 133-148
- (8) F. W. Carter (1994). *Trade and Urban Development in Poland - An Economic Geography of Cracow, from its Origins to 1795*: Cambridge University Press, 46-56
- (9) *Ibid.* 42-62
- (10) *Ibid.* 67-81
- (11) *Ibid.* 100-143, 156
- (12) *Ibid.* 142-153
- (13) *Ibid.* 155-160
- (14) *Ibid.* 163
- (15) *Ibid.* 163-165
- (16) *Ibid.* 163-169
- (17) *Ibid.* 172-
- (18) *Ibid.* 189-194
- (19) George Weigel (2015). *City of Saints: IMAGE*, 4-6
- (20) *Ibid.* 34-35, 154-155, 171-173
- (20) G. ブアジンスキ, 『クラクフからローマへ』, 中央出版社, 1980年, pp. 26-27
- (21) 上掲書, pp. 82-341
- (22) 教皇ヨハネ・パウロ2世, 『立ちなさい。さあ行こう』, 2006年, サンパウロ, pp. 203-210
- (23) 加藤久子, 「社会主義政権下での宗教実践」, 中野智世・前田更子・渡邊千秋・尾崎修治編著, 『近代ヨーロッパとキリスト教』, 勁草書房, 2016年, pp. 33-57

A History of Krakow and its Cultural Assets

Yasuo IJIMA

Abstract

This article intends to articulate the rich history of the cultural city of Krakow. This city is located at the eastern end of the Latin medieval world. Its characteristics are as follows: it is famous for Krakow University, established in the fourteenth century; economic prosperity was brought by long-distance trade; it was partly engaged in the Hanseatic League; and had links to various city-states in Italy. Some items like textiles, cloth, silk, and wine were brought into the city from all over Europe and even from the Far East. Another thing to note about the city is that it is culturally rich in the sense that printing, manuscripts, and book publishing developed, while guilds of hand-made craftsmen played a major role in the self-governance of the city. In the modern period, especially in the twentieth century, the city faced the terrors of Nazism and Communism. This article examines how major figures such as Pope John Paul II and the good habits and lifestyles of ordinary people helped the Polish people overcome these foes.

Key words: University, Cultural Assets, Festivity